

平成 30 年度  
**事業報告**

## 産経新聞厚生文化事業団

平成 30 年度は、新しい時代に対応した社会福祉法人の組織運営に取り組んだ。とりわけ、改正社会福祉法で示された経営組織のガバナンス強化、財務規律の強化、事業運営の透明性向上を重点に基盤整備を進めた。国が福祉改革の基本方針として掲げる「地域共生社会」の実現に向けては、事業団のこれまでのノウハウや影響力を生かして行政や大学、社会福祉協議会などと地域をつなぐイニシアチブを取り、地域のニーズに応えた。

新聞というメディアを母体に誕生した事業団の使命として、30 年度に発生した西日本豪雨災害と北海道地震、さらには東日本大震災の救援金受け付けに取り組み、被災地・被災者支援にあたった。地道なボランティア活動を顕彰する「産経市民の社会福祉賞」、障害者芸術にスポットをあてる「産経はばたけアート公募展」、チャリティーコンサートやチャリティーイベントなど、多彩な福祉事業も繰り広げた。国内外の心臓病の子供を救う「明美ちゃん基金」は独立した会計処理で活動を行った。

各施設・事業所は、障害のある利用者が安心して安全な日常生活を送れることを基本にした運営に努めた。支援員は福祉の原点ともいえる「安心感」を利用者にどう持ってもらえるかに知恵を絞り、より利用者視点に立った食生活や健康管理の充実にも尽くした。また、行政や地域の福祉関係者とのネットワークづくりを強め、地域移行の推進、地域との交流促進など地域に必要とされる施設・事業所を目指した。

大阪府能勢町の障害者支援施設「第 2 三恵園」は、施設内のエレベーター改修工事を行った。利用者の加齢に伴う心身機能の低下や介護度の進行に対応した生活環境の整備で、緊急搬送などで迅速に対処する。同じく能勢町にある就労継続支援 B 型事業所「すみれ工房」は、同町栗栖に取得した用地で造成工事を行い、早期の建設着手に向けて動き出した。また、障害福祉サービス事業所「池田市立くすのき学園」は、指定管理更新のため市が運営主体を公募し、引き続き運営を受託した。

## (1) 事業団本部の事業概要

### 本部

#### ■西日本豪雨で2億5700万円、北海道地震で5500万円寄託

30年7月に西日本を襲った豪雨災害では、被災された人たちを支援するための善意が全国から寄せられた。救援金は総額2億5778万1657円にのぼり、甚大な被害が出た岡山、広島、愛媛の3県に3等分して寄託した。一方、30年9月に起きた北海道地震でも被災地を支援しようと救援金が全国から寄せられ、総額5519万2903円を北海道に寄託した。

平成23年3月の発生直後から行っている東日本大震災の救援金募集は、30年度も継続して受け付け、被災した子供たちを支援する「いわての学び希望基金」「みやぎこども育英募金」「ふくしまこども寄附金」にそれぞれ120万円、計360万円を寄託した。第12次配分となる今回の寄託で、被災地・被災者に送られた救援金総額は計10億7520万円となった。

#### ■産経市民の社会福祉賞

社会的に弱い立場の人たちに寄り添いながら、地域福祉に貢献している団体・個人を顕彰する第44回「産経市民の社会福祉賞」の表彰式を30年11月29日、大阪市北区の新阪急ホテルで行った。30年度受賞の2団体、1個人に対し、産経新聞厚生文化事業団の佐藤義博理事長から表彰状が贈られた。式には約100人が出席。選考委員を代表して弁護士の高橋邦子さんが選考経過を報告。受賞者の活動報告も行われた。

受賞したのは、「子ども食堂」の運営など住民同士の支え合いで地域の課題解決に取り組む「府営狭山住宅北自治会」（大阪府大阪狭山市、松嶋玲子会長）、死別や喪失などの悲嘆と向き合い、その悲しみを話せる場を提供する「かなしみぼすと」（大阪市中央区、中嶋雅美代表）、貧困や性犯罪被害に苦しむ在日の外国人女性への支援を続けてきた大石由紀子さん（神戸市北区）。

#### ■産経はばたけアート公募展

障害のある人たちのアート作品を公募、展示し芸術活動を支援する「産経はばたけアート公募展2018」が30年9月15、16の両日、大阪市北区のブリーゼブリーゼで開かれた。全国から109点の作品が寄せられ、審査会で選ばれた最優秀賞の大賞と優秀賞、佳作合わせて18点が展示された。15日には表彰式を行い、佐藤理事長から表彰状が贈られた。会場には多くの人を訪れ、「作者が感じたままを描き、自分の世界を出しているのが素晴らしい」などのコメントが寄せられ、多彩な作品群に見入っていた。

#### ■チャリティーコンサート

「帝国ホテルの音楽會」は30年度に大阪市北区の帝国ホテル大阪にあるチャペルで計14回開催した。コンサート入場料の一部は同ホテルから事業団に寄託され、社会福祉に

役立てられた。大阪市北区のホテルエルセラーン大阪では、30年度に「名歌繚乱チャリティーコンサート」を計12回催した。入場料の一部は、社会福祉に役立てるため事業団に寄託された。

## ■チャリティーイベント

よしもとクリエイティブ・エージェンシーと松竹芸能の人気タレントらが漫才、落語などを披露する第48回「お笑いなにわ祭」は30年6月23日、大阪市天王寺区の大阪国際交流センターで開催。障害者施設や高齢者施設の利用者をはじめ一般市民ら約700人が来場し、笑いに包まれた。収益は社会福祉のために役立てた。

有名作家の作品を展示・販売する「チャリティー絵画展」は30年7月10日から16日まで7日間、ギャラリー大井（大阪市北区）と西武百貨店の協力により大阪府高槻市の西武百貨店で開催した。収益金の一部は社会福祉に役立てられた。

## ■新たな事業展開

子供の貧困や居場所のない現実に着目し、大阪市・同市社会福祉協議会が進める「子ども食堂」など地域で子供を支える事業に参画した。また、地域の抱える課題をどう解決していくか、大学生や行政職員と一緒に考える桃山学院大学・泉大津市の産官学連携事業「アクティブラーニング授業」に事業団職員5人を派遣。解決手法や関係政策についての共同研究を開始した。

## 明美ちゃん基金

### ■モンゴル女兒に適用

先天性の重い心臓病を患う生後9カ月のモンゴル人女兒が基金の適用を受けて30年4月に来日し、東京都新宿区の東京女子医大病院で手術を受けた。約1カ月入院した後、無事帰国した。これを契機に、モンゴルでの治療活動の可能性を探るために現地医療施設を視察した。

### ■4年目のミャンマープロジェクト

4年目となった「ミャンマープロジェクト」では30年9月と31年2月の2回にわたって渡航治療を実施し、計71人のカテーテル治療と外科手術を行った。これでミャンマーでの治療実績は275人となった。また、プロジェクトの一環として現地医師を日本に招いての研修を1年間実施した。

### ■パネル展で活動PR

国内の心臓移植患者に対する30年度の支援は過去最高の7人にのぼった。30年7月に横浜市西区で開かれた日本小児循環器学会の学術集会で、基金のこれまでの活動を紹介するパネルを展示し基金の認知度が高まったのと、ドナーへの理解が深まったのが要因とみられる。

## (2) 各施設・事業所の事業概要

### 救護三恵園

#### ■生活を支える

利用者一人ひとりのニーズを尊重し、その人らしい生活を送れるよう定期的に会議を実施。できることを増やし、自信を持って生活を送れるようにした。その結果、作業や実習に継続して取り組めるようになった。また、地域に10人が移行できた。

#### ■日中プログラムの充実

日々の生活の中で体を使って楽しめるプログラムを作成。ミュージックケアやボランティアによる歌体操、エアロビクスなど体を動かし、音楽を積極的に楽しむことができた。また、自主製品に力を入れて作る喜び、販売、購入してもらう、という一連の流れを経験することにより、意欲向上にもつながった。

#### ■地域貢献に積極的に参画

地域のために施設内にある地域交流室を毎週土曜日に開放。学習するスペースなどをもうけるが、利用人数は少数であり、その場所へくるまでの移動手段など課題もみえてきた。また能勢町社会福祉協議会が実施する町内の独居老人に向けた地域活動「ふれあい給食」サービスに参加。30年度は450食の弁当作りを実施した。

### 第2三恵園

#### ■設備改修による支援環境の充実

車いす6台が乗れる大型エレベーターを増設したことで、食堂などへの移動がスムーズになった。利用者の救急搬送にも利用する。また、トイレと洗面所を改修し、新たにシャワートイレや手すりを設置したほか、壁面のパネル化で清掃しやすくした。

#### ■健康・介護・将来的な権利擁護の支援

理学療法士と連携し、利用者の個別状況に応じた適切なりハビリテーションと機能維持を目的としたプログラムを提供した。家族と連携し成年後見制度の利用及び申請のサポートを行い、30年度は3人を選任。結果、在籍41人中29人が後見人選任となっている。

#### ■高齢知的障害者支援の専門性を高める

言語聴覚士の講師を招き職員全員が嚥下機能についての研修を受講した。おむつ検定を受講した職員もおり、伝達研修で施設全体で技術を共有することによって高齢期の特性に合わせた取り組みを実施した。

## 大里荘

### ■利用者が自信の持てる活動を支援

一人ひとりの個別支援計画に、一人での買い物の練習や温泉利用時の道順の確認など本人が少し頑張ればできそうなことを設定。30年度も数人の利用者が自分で買物できるようになった。また、土・日曜日の世話人配置時間を増やし、一人ひとりに対応した活動を更に充実させた。

### ■地域の一員として暮らす事を支援

自治会清掃やごみ当番、地元の祭りや地域のサロンに参加し、名前でも呼んでもらえる関係を築くことができた。最近では、地域住民がグループホームに気軽に訪問してくれるようになった。

### ■高齢者の暮らしを支える

高齢化に伴い、一人ひとりに対応した食事形態が求められるようになり、刻み食、軟食、腎臓病食、糖尿病食にも対応している。看護師の配置時間を増やし、病気の早期発見、早期治療に努めた。また、バリアフリー住宅への住み替えを3カ所で実現。夜間支援対応ホームも2カ所増やし、更に高齢化に対応した。

## なごみ苑

### ■安全・安心な環境づくりを目指して

みんなが主役になれる居場所を目指し、笑顔で元気に過ごせる環境づくりを意識した。外部の方と交流することで気持ちも豊かになった様子。今後も事業所内に留まらず、外部との繋がりが広がるよう活動を行っていく。

### ■「やりたい」を叶える

それぞれに適した場面で主役となって活躍できる場を設けた。ある人は、フリーマーケットでの販売、ある人は料理、ある人は弁当の配送と、場面場面での役割を持つことが生きがいや励みとなっている。

### ■地域の人との繋がりを大切に

なごみサロンに来訪する地域住民の紹介で月2回、墨絵を教えてもらうことになった。31年度は作品展示を行いたい。また、地区のいきいき百歳体操や台風災害以降できた地区の集まり「この指と〜まれ」などの団体の活動に参加し、新しい出会いが増えた。

## すみれ工房

### ■建替えに向けて準備

入札で施工事業者が決まり、建物の作業室を中心にレイアウトを調整中。ほかに、ハード面の整備として集塵機を購入した。前年度購入した野菜乾燥機による乾燥椎茸や筍の水煮の真空パックなどが好評を博している。また、通所者の増員に伴い、作業場が手狭になったので作業内容を精査した。

## ■就労移行（多機能事業所）の準備

「相談くすのき」と連携し当事者のニーズに沿った就職活動を実施した。具体的には、就職者の職場訪問だけでなく、関係機関との情報交換や密な情報共有で切れ目ない支援を展開した。しかし、すみれ工房から就職した利用者の離職が数件あった。

## ■平均工賃 2 万円を目指す

作業時間を 1 日 30 分短縮したが、利用者の作業能力の習熟や通所者の増員によって平均工賃は増え、19,253 円になった。一人ひとりが自分の役割を持ち、「任される、頼られる」を大切にしている。出勤から作業の準備、片づけなど自主的に取り組める環境を整えることによって一体感が生まれている。こうしたなかで、担当利用者の能力が開花し就職も視野に入れられる段階になっている。

## ■ニーズに応え定員増

地域の利用ニーズに応えるために、年度当初 25 人だった定員を 6 月から 30 人に増やした。

## たんぼぼの家

### ■開所日数の増加

30 年度より盆期間中の休所日をなくし、開所とした。また年末年始の休所期間も例年より短くした。盆期間中にはレクリエーションの日を設け、利用しやすい環境づくりにつとめた。家族のニーズに応え、利用者の生活リズムを安定させることにつながった。

### ■新たな仕事へのチャレンジ

新たな作業として、9 月から豊能町広報誌のポスティングを請け負い約 800 軒に配布した。利用者が働く姿を地域の方に応援していただける機会になるとともに、作業を通じた体力づくりにも一役かっている。また、移動販売車「喫茶たんぼぼ号」の新たな出店先として老人福祉センター「豊寿荘」が決まり、月 1 回行っている。

### ■新たな体験を積む機会の確保

地域のパン屋と連携して、利用者向けの「パン作り教室」を開いた。パン生地 of 成形や惣菜パンのトッピングなど、個々の能力やペースに合わせた体験ができた。「パン屋さんになりたい」と言う利用者さんもあり、自身の仕事について考え、選択する動機づけになった。

## 池田三恵園

### ■新人教育と研修を強化

新人職員 6 人を迎え、教育訓練 (OJT) に力を入れた。新人職員が相談できる体制をとり、少しでも不安が解消できるように取り組んだ。自閉症療育の専門家、小林信篤氏を招聘し、自閉症者支援について基礎から学んだ。

## ■地域との積極的な交流

地域交流室を無料開放することで、地域の皆さんにたくさん使ってもらっている。そこから利用者とのつながりができ、友好の輪が広がっている。ボランティアで来ていただいている人たちと茶話会を開き、利用者本人が日ごろの感謝を伝えた。

## ■グループホームへの移行

2人がグループホームへ移行した。1人は大里荘、もう1人は伏尾台ホーム。相談「くすのき」や各事業所と連携し会議を持ちながら進めた。また、生活介護から就労移行に変わった1人が新たな場所で頑張っている。

### 伏尾台ホーム

## ■得意なことの洗い出し

グループホームでの生活を充実させるために、調理や買い物など本人が得意なことを洗い出し、それを本人の役割として1年間続けてもらった。

## ■地域の人々と顔見知りになる

近隣歩行によって地域住民と顔見知りになる機会を増やしたところ、いろいろな人から声をかけてもらえるようになった。地域住民を招待したはじめてのクリスマス会では、ピアノ演奏や歌の披露があり楽しく交流できた。

## ■他施設との連携・交流

法人内外の他のグループホームから受け入れ、伏尾台ホームでの生活を知ってもらう機会を増やした。大里荘と合同で職員研修を行い、「この仕事の魅力について」をテーマにグループワークを行った。また、外部専門家を招いて自閉症者支援について学んだ。

### こすもす

## ■健康的な生活を目指した支援

健康的で充実した生活を送るために、専門職（医師、看護師、理学療法士、歯科衛生士）のアドバイスを受けながら、運動を取り入れた活動プログラムを組んだ。雨天時用にミニハードルやラダーなどを導入して、室内でも楽しく体を動かせる取り組みを始めた。また、グループホームと連携して、生活に必要な動きを想定し、こすもす内での活動に取り入れた。

## ■個別プログラムを活用した支援

「やりたいこと」や「楽しみ」を取り入れたメリハリのある生活リズム作りを支援するために、新しい活動を提供しながら選択肢を増やした。作業室にロールカーテンを設置して、一人ひとりが集中しやすいように環境を整えた。



## ■「働く」を見つける支援

「やりたいこと」や「できること」から、一人ひとりの「役割」や「働く」につなげるため、これまでの活動を細分化して、「できること」をしっかりと見つける支援を続けている。30年度は、アルミ缶作業、キャップ分別、安全ピン作業にあたることのできる利用者も増え、作業の収益金もアップした。

## ■地域への情報発信

地域で開催されるイベントへの参加、ほっこりひろばやオープン施設の開催、実習生の受け入れなど、利用者が施設以外の人と触れ合う機会を多く持つことで、障害のある本人を中心とした人の輪づくりに努めた。

### 池田市立くすのき学園

## ■本人の働きたい、働くを支援

「働いて工賃を得る」を目標に掲げ、受託作業量の確保と安定した工賃支給に努め、目標工賃を達成した。また、就労に向けて達成感が得られる環境を整備したことで、一般就職とA型事業所へ各1人が移った。

## ■アセスメントの徹底

一人ひとりの「できる」に着目し、細やかなアセスメントやモニタリングを繰り返し実施することで生活の安定を図った。しかし、その実践の場であったうどん屋「くすのき庵」の建物が6月の大阪府北部地震で損傷し、休業状態となった。

## ■協働と連携

本人のニーズに寄り添った支援にし、家族や関係機関と連携し「一緒に考える」体制を整備するため、定期的にケース会議や懇談会を精神科嘱託医による健康相談日に設定し、支援の一本化に努めた。

### ワークスペースさつき

## ■本当に意味のある個別支援

「本当に意味のある個別支援計画を」という狙いで利用者本人から聞き取りを行い、「当事者の想い」を計画に反映させた。また、個々の利用者の障害特性に配慮した大幅なレイアウト変更を行った結果、多くの利用者が作業に集中でき、利用者間のトラブルが激減した。

## ■地域啓発・社会貢献活動

地域の中学校の福祉体験の事前学習や高校の人権ホームルームに当法人内の事業所職員、利用者と共に参加した。地域イベントへの参加、フェイスブック、ホームページを活用しての地域啓発に努めた。また週2回、事業所周りの清掃活動にあたった結果、地域住民から声をかけてもらえるようになった。

## ■安定した経営に努力

上半期に1人、下半期に3人の利用者が退所した。更に1名の利用者が下半期より家庭の事情で長期欠席状態となったため、関係機関に積極的なリクルートを実施し、下半期に3人の新規利用にこぎつけた。

## ■ボランティア・実習生

池田市手をつなぐ親の会のメンバーや保護者らが定期的に内職ボランティアとして事業所に訪問してくれたほか、池田市社会福祉協議会のボランティアセンターへの登録によってボランティア数人が定着するに至った。結果、年間を通じて週のうち2～3日はボランティアがいる状況となった。

## 福祉相談「くすのき」

### ■相談支援の更なる質の向上

池田市・豊能町・能勢町の1市2町から委託を受け、また能勢町からは基幹相談支援センターの委託を新たに受け、相談活動を実施した。相談者からのニーズが年々、複雑かつ多様化しているなか、相談支援の更なる質の向上が求められており、今年度は定期的に行っているケース会議の場に専門家を招き、指導を受ける機会をもった。

### ■多様な機関とのネットワークを構築

相談者からの多様なニーズに対応していくべく、これまでの障害福祉分野における関係機関との繋がりだけでなく、相談ケースを通じて地域包括支援センターやケアマネジャーなどの高齢福祉機関、学校や児童クラブ、デイサービスなどの児童機関、保健師や訪問看護ステーションなどの保健、医療における機関と積極的に連携し、ネットワークの輪を広げた。

### ■確実なモニタリングの実施

計画相談利用者が置かれている状況を把握し、将来の見通しも立てながら利用者の思いを実現できるよう、本人、家族、関係機関から聴き取りモニタリングを実施した。利用者の「生活の質」向上に向けた相談支援を展開していく。

### (3) 平成 30 年度に実施した理事会・評議員会

#### 理事会

30 年度は 4 回開催し全案件について可決、承認された。

#### 【第 1 回】

産経新聞社 8 階会議室で 30 年 5 月 30 日 13 時 30 分から開催。

- ◇第 1 号議案 平成 29 年度事業報告（案）について
- ◇第 2 号議案 平成 29 年度決算（案）について
- ◇第 3 号議案 施設管理者人事について
- ◇第 4 号議案 平成 30 年度第 1 回評議員会の開催（案）について
- ◇第 5 号議案 理事の選任（補充）案について

〈報告事項〉

- お笑いなにお祭

#### 【第 2 回】

平成 30 年 9 月 12 日書面決議。

- ◇第 1 号議案 救護施設三恵園屋外木製手摺取替工事の発注及び契約締結について

#### 【第 3 回】

産経新聞社 8 階会議室で平成 30 年 10 月 31 日 13 時 30 から開催。

- ◇第 1 号議案 「すみれ工房」新築移転事業計画及び工事の発注（案）について
- ◇第 2 号議案 「すみれ工房」建設費の福祉医療機構借入申込（案）について
- ◇第 3 号議案 その他の固定資産（土地・建物）の処分方法（案）について

〈報告事項〉

- 職務執行状況
- 西日本豪雨災害救援金ならびに北海道地震救援金について
- 救護施設三恵園屋外木製手摺取替工事発注及び契約締結について

#### 【第 4 回】

産経新聞社 8 階会議室で 31 年 3 月 14 日 14 時から開催。

- ◇第 1 号議案 平成 30 年度補正予算（案）について
- ◇第 2 号議案 平成 31 年度事業計画（案）ならびに予算（案）について
- ◇第 3 号議案 定款の一部変更（案）について
- ◇第 4 号議案 すみれ工房新築整備事業の契約締結（案）について
- ◇第 5 号議案 諸規定の改正（案）について
- ◇第 6 号議案 平成 30 年度第 2 回評議員会開催（案）について

〈報告事項〉

- 職務執行状況
- 西日本豪雨災害救援金ならびに北海道地震救援金、東日本大震災救援金について
- 固定資産・旧平通荘（土地・建物）の売却について

## 評議員会

30年度は評議員会を2回開催し全案件について可決、承認された。

### 【第1回】

産経新聞社5階会議室で30年6月26日13時30分から開催。

◇第1号議案 平成29年度事業報告（案）について

◇第2号議案 平成29年度決算（案）について

◇第3号議案 理事の選任（補充）（案）について

〈報告事項〉

○お笑いなにお祭

### 【第2回】

産経新聞社8階会議室で31年3月29日13時30分から開催。

◇第1号議案 平成30年度補正予算（案）について

◇第2号議案 平成31年度事業計画（案）ならびに予算（案）について

◇第3号議案 定款の一部変更（案）について

〈報告事項〉

○西日本豪雨災害救援金ならびに北海道地震救援金、東日本大震災救援金について